

---

# ホーム = スウィート = ホーム

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホームⅡスウィートⅡホーム

### 【Nコード】

N3215R

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

一人のオペラ歌手が引退する。その歌手が最後に歌う為に選んだ曲は。オーストラリアを代表するオペラ歌手デイルⅡジョーンⅡサザーランドの引退の時のお話です。実話をもとにしています。

## 第一章

ホーム「スウィート」ホーム

「本当にそれで宜しいのですね」

「はい」

大柄な女性がだ。紳士の言葉に応えていた。

「それで御願います」

「わかりました。では最後の舞台はそれですね」

「こつもりを御願います」

それだというのである。見れば茶色のカールさせてある長い髪に青い目をしている。顔は細長くそれでいて四角い感じである。頬骨が出ている。

彼女はだ。オペラ歌手である。この国を代表する歌手だ。

その彼女がだ。遂に引退する時になったのだ。還暦を優に超えてからだ。

そして最後の舞台にだ。その作品を選んだのである。

「それで」

「わかりました。それでなのですが」

「いえ、私はその舞台だけで」

「そうはいきません」

すぐにこつ述べた紳士だった。

「せめて最後にです」

「最後に」

「一曲。特別に歌われてはどうでしょうか」  
こつ彼女に言うのだった。

「そうされてはどうでしょうか」

「一曲ですか」

「はい、どうぞでしょうか」

「一曲といえますと」

「今まで色々な歌を歌ってこられましたね」  
「はい」

これはその通りだ。オペラ歌手としてだ。本当に色々な役を演じ色々な歌を歌ってきた。オペラの歌だけではなく賛美歌や民謡もだ。実に多く歌ってきた。

それを言われてだ。彼女もこくりと頷いたのであった。

「その通りです」

「ではその中から何か一曲」

紳士はまた述べてきた。

「何を選ばれますか」

「そうですね、ここは」

「はい、どの曲を」

「少し選ばせて下さい」

今はこう言うだけだった。

「少し」

「そうされますか」

「まだ時間がありますね」

「はい」

紳士も答える。その通りだというのである。

「それは御安心下さい」

「はい、それでは」

「既にその舞台の場所も決まっていますし」

「ロンドンですね」

「ロンドンロイヤルオペラです」

イギリスで有名なオペラハウスの一つだ。イギリスも有名なオペラ歌手や指揮者を多く出しているのである。それはイギリス連邦の国でも同じだ。彼女にしてもオーストラリア人である。

「そこで」

「そうでしたね。そこで」

「ではその時まで考えておいて下さい」

「はい」

こうしたやり取りの後で自宅に帰る。そこはシドニーの丘の上にあるプールのある屋敷だった。そこには至るところに刺繍がある。

そこに彼女の名前のイニシャルがある。そしてだ。

眼鏡をかけて穏やかな顔の、彼女より幾つか年下と見られる男が彼女の前に来てだ。穏やかな声で彼女に言ってきたのだった。

「おかえり」

「ええ、只今」

「あの話だね」

彼はこう彼女に切り出してきた。

「そうだね」

「ええ、最後の舞台だけねど」

「それで話は決まったんだね」

「いえ」

「決まらなかったのかい」

「最後の歌は。何がいいかしら」

こう彼に問うのだった。問いながら部屋のソファアに座る。彼もそれに続く。

## 第二章

そして二人でだ。話に入るのだった。

「考えているけれどそれでも」

「それで僕にだね」

「ええ。相談に乗って欲しいの」

そうだとだ。彼に話すのだった。

「夫でもありボイストレーナーでもある貴方にね」

「そして指揮者でもある」

彼は自分からこのことを話してきた。

「そうだね」

「最後の舞台も貴方が振ってくれるから」

「うん。だからこそだね」

「それでどの曲がいいかしら」

あらためて夫に問う妻だった。切実な顔でだ。

「あなたはと思うかしら」

「一つあるよ」

夫はこう妻に告げた。

「一曲。いい曲がね」

「あるの」

「ないと言えば嘘になるよ」

穏やかな笑みを浮かべての言葉だった。

「それはね」

「じゃあその曲は」

「ほら、君がずっと歌ってきたね」

「ずっと?」

「そう、ずっとね」

その曲だというのだ。

「君が歌ってきた曲だよ」

「多いけれど」

歌手である。それならばだ。

その数も実に多い。彼女は自分ではわからない。

だが夫はだ。その妻にあえてヒントを出すのだった。

「だから君が子供の頃からずっと歌ってきた曲だよ」

「ずっとなのね」

「そう、ずっとだよ」

微笑んでだ。ヒントを出したのだった。

「これでわかったかな」

「ええ」

彼女もここでわかった。それでこくりと頷いた。

そしてだ。夫に対してこう話したのだった。

「あの曲ね」

「歌えるよね」

「勿論よ」

穏やかな笑みをだ。彼女も浮かべた。

そのうえでだ。夫に対して答えた。

「じゃああの歌を」

「歌おう。それでいいね」

「わかったわ。それじゃあね」

こうしてであった。二人で話をしてだった。決めたのだった。

彼女は夫と共に最後の舞台を進めていた。そしてロンドンに向かった。

ロンドンの最後の舞台はだ。その彼女の最後の舞台を見ようという観客達で溢れていた。皆口々にこう話していくのだった。

「長い歌手生活もな」

「そうだな、終わりだな」

「いい歌手だったよ」

しみじみとした言葉も出た。

「これでお別れなんて惜しいよ」

「本当にな」

「あの人柄も好きだったよ」

「温かくてな」

その人柄も評価の高い歌手だったのだ。

「歌手としての技量だけじゃなくてな」

「夫婦で二人でずっとやってきたしな」

「そうそう、それな」

夫もだ。話に入ったのだった。

「あの御主人と一緒になっただからな」

「あそこまでなれたよな」

「全くだよ」

こう話されるのだった。

### 第三章

「あの御主人だからあそこまでなれた」

「そしてあの御主人もな」

「最高のプリマドンナを手に入れたしな」

彼にとってもいいことだったというのだ。

「最高の巡り合わせだったよな」

「まさに神のお導きだよ」

「全くだ」

「さて」

こうした話をしているうちにであった。

いよいよ開幕の時間だ。オーケストラはもう用意に入っている。

「はじまるな」

「ああ」

「これから」

誰もが無意識のうちに身構えた。

「最後の歌が聴けるぞ」

「プリマドンナの最高の技巧がな」

「これで聴きおさめだ」

「耳に残してやる」

彼等もまた期待していた。そうしてだった。

彼女が出て来るのを待っていたのだ。その時彼女は。

舞台裏でドレス姿になってた。夫と話していた。彼はこう妻に告げていた。

「それだけでけれどね」

「ええ、最後の歌ね」

「それはもうあれでいくよね」

「ええ、あれにするわ」

こう夫に答えた彼女だった。

「あの歌でね」

「そう、わかったよ」

「あの歌よね」

「わかったんだね」

「私はずつと歌ってきた歌っていったら」

彼女は真剣に考える顔でだ。夫に述べたのだった。

「あれしかないから」

「そうだよ。やっぱりわかったんだね」

「ええ、それじゃあ」

「その時が来れば出てね」

「私の最後の舞台に」

「第二幕だよ」

その時だというのである。

「頼んだよ」

「ええ」

夫の言葉にこくりと頷きだ。その最後の時を待つのがだった。

舞台がはじまり少しずつだが確実にその第二幕に近付いていく。

こつもりの第二幕は宴会の場面でありそこでゲストが出ることもあるのだ。今回のゲストは彼女ということだ。

観客達もそれがわかっていた。そうしてである。

第二幕を待っていたのだった。

「いよいよだな」

「そうだな」

「第一幕が終わった」

「後はな」

「第二幕がはじまるぞ」

「遂にな」

それを待つてだ。そうしてであった。

第二幕の幕が開いたのだった。そしてその時が来た。

彼女が舞台に出て来た。その時に観客席から拍手が起こった。

そしてだ。彼女が舞台の中央に来るとだった。舞台にまた二人来た。

髭だらけの顔の太った男に立派な体格の女がだ。それぞれタキシードとドレスで来たのである。そうしてそのうえで彼女のところに来たのだった。

「えっ、おい」

「あの二人まで来たのかよ」

「まさか」

「こんなサプライズが」

観客達は二人の姿を見て驚きを隠せなかった。二人共オペラ界にその名前を知られている世界的な存在である。彼女に匹敵するだけのだ。

その彼等がだ。出て来て彼女に告げるのだった。

「デイム、おめでとう」

「最後の舞台ね」

サーという称号の女性名称である。それを告げての言葉だった。

「その歌、是非」

「聴きたくて」

「来てくれたのね」

それがわかってだ。彼女は言うのだった。

「有り難う……」

「それじゃあね」

「いいわね」

二人は笑顔でだ。また彼女に告げたのだった。

## 第四章

「その歌を是非」

「聴かせて」

「ええ、わかつたわ」

二人の言葉を受けてだ。いよいよだった。

指揮者の席には夫がいる。彼も指揮棒を持っていた。

いよいよ歌の準備がはじまる。そしてだった。伴奏がはじまった。

その伴奏を聴いてだ。皆驚きを隠せなかった。

「んっ、この曲は」

「まさか」

「あれか？」

「あの曲か？」

観客達もその曲が何かわかった。それはだ。

「ホーム」スウィート」ホーム」

「民謡か」

「それにしたのか」

「まさか。この曲なんて」

その曲になつたことにだ。誰もが驚きを隠せなかった。

実は彼等はだ。こんなことを考えていたのである。

「ランメルモールのルチアだと思つたのにな」

「いや、ノルマだろ」

「清教徒じゃないのか？」

「いや、ラクメに決まつてる」

どれも彼女が得意としていた役があるオペラである。彼女はその

高音、コロトゥーラの技術が完璧なことで知られていたのである。

それでそうした役だと考えられていた。しかしなのだった。

その民謡だった。皆このことに驚きを隠せなかった。

だが、だった。驚きは一瞬のことだ。皆言うのだった。

「けれどな」

「そうだよな」

「あの人らしいな」

「そうだよな」

納得しだしたのだった。

「あの穏やかな曲でな」

「それでいいよな」

「似合ってるよな」

「あの人に相応しい」

彼女の人柄は知られていた。だからその人柄と合わせて考えられてだ。それで納得したのである。そして納得したならばだ。

後は聴くだけだった。その曲をだ。彼女はゆっくりと歌いはじめたのだった。

曲は進み歌っていく。そしてであった。

彼女は万感の思いを込めて歌っていく。歌うと共にこれまでの、歌手として、そして幼い頃より歌ってきた記憶も思い出していた。そしてだ。

その記憶の中にありながら歌い。そして最後にだった。

歌い終わるとだ。全てが止まった。時が止まったのだった。

彼女はその場に立っていた。そして動かなかった。そこにだ。

「ブラボーーーーーー!!!!!!」

「最高の歌だったよ!」

「最後にその歌を有り難う!」

「貴女のことは忘れないからね!」

拍手と歓声がオペラハウスを支配した。誰もが彼女に温かい声をかける。

彼女は涙を流しながらその拍手と歓声を受けていた。そしてだ。舞台にだ。今ネオンが輝いた。その文字は。

『GOOD BY』

この文字だった。この文字がネオンに輝いてだった。彼女に別れ

を告げるのだった。

## 第五章

「あの歌でよかったな」

「そうだよな」

「何でだ？涙が出るな」

「私も」

「僕も」

観客達は泣いてきていた。そしてだった。

彼女にまた拍手を送る。声援もだ。そして言うのだった。

「さようなら！」

「これで！」

何度もアンコールが行われその都度舞台に戻り。万感の拍手が舞台を何時までも支配していた。

それからだった。彼女はロンドンを発ちオーストラリアの我が家に戻った。夫と共にだ。

そしてそのうえでだ。夫に顔を向けて話した。

「只今」

「おかえり」

にこりと笑い合ってた。そのうえでのやり取りだった。

「それじゃあこれからはね」

「この家でね」

「ずっといるわ」

そうするというのだった。

「我が家にね」

「だから勧めたんだ」

夫はここで話した。

「あの歌をね」

「そうだったの」

「あの歌からこの家に戻って」

「歌手から普段の生活に戻って」

「そう、だからね」

それでだというのである。

「あの曲にしたんだ。それに」

「それに？」

「生まれたのはこの国だったじゃない」

オーストラリア、この国だというのだ。

「その国で、家で生まれてね」

「そうして戻って来るから」

「だから。あの歌を勧めたんだ」

「家に生まれ家に戻るから」

「だからだよ。それじゃあね」

「ええ、それじゃあ」

「あらためて。おかえり」

また告げる夫だった。家に戻ったその挨拶を再びだった。

「これからはね」

「ええ。この国、この家に」

妻もだ。微笑んでの言葉だった。

「いるわ。ずっとね」

「僕達でね」

これがオーストラリアを代表するディム・ジョーン・サザラン  
ド・ボニングの引退の時の話である。そして夫のリチャード・ボニ  
ングはその妻を笑顔で迎え入れたのだった。その最後の歌はだ。こ  
の歌だったのだ。温かい家族の、家の歌だったのだ。

ホーム・スウィート・ホーム 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3215r/>

---

ホーム = スウィート = ホーム

2011年3月2日22時25分発行